

日本最初の沙翁劇の番付について

中村宗十郎、琥珀郎で演じた『何櫻彼櫻錢世中』が沙翁の『ベニスの商人』の翻案であつて、これが日本の舞臺に上つた最初の沙翁劇である。

翻案者は宇田川文海で、大阪朝日新聞に連載された「正本製」である。こゝに掲げたのが明治十八年五月十六日初日で戎座——今の浪花座で開場の『ベニスの商人』六幕の番付である。名題が『何櫻彼櫻錢世中』とあり六幕を、「新聞六號」と傍にかいてゐるのも、明治の初年らしい。更らに、この名題の上のカタリが、

趣向は沙士比阿の肉一斤、文章は柳亭種彦の正本製

とある。こゝに掲げた寫眞版は、ほんの面影を示しただけであるから役割を記しておかう。

シャイロツク(榊屋五兵衛)

中村琥珀郎

バツサニオ(青木庄太郎)

實川延三郎

アントニオ(紀の間屋傳次郎)

中村宗十郎

ポーシャ(米田小三郎實は中川玉榮)

阪東壽三郎

ネリツサ(下女梅)

嵐みんし

に當る役割である。

因みにこの繪入番付は、從來大阪仕立の形式とは異ふもので、一枚摺の繪本位で、下に場割、役割を示したのは、東京風であつたのを、改革すきの中村宗十郎が、この「ベニス商人」の前興行から。この東京風の形式を採つたもので、この記念すべき、日本最初の沙翁劇の繪番付の形式は一方からいふと、大阪舊來の番付風を廢して、東京風にした二度目の番付であるのである。

尤も畫風は、東京のソレは鳥居一派の筆意であり、大阪のは大阪繪である事は勿論であつた。

